

故 名誉会員 福留 並喜 氏 を し の ぶ



去る1月25日突然 福留並喜氏の逝去が伝えられた。非常に驚ろいたのと同時にあのにこやかな 温容を再び見ることができないかと思うと急に淋しさを感じた。

君は明治13年4月高知県香美郡美良市に生れ、高知県尋常中学校、第三高等学校を経て、京都帝国大学理工科に入り、明治37年11月に卒業している。卒業後は北海道を初め各地の鉄道関係に従事し、大正10年9月から大阪市の土木関係の仕事を担当している。そして大阪市理事として港湾部長、土木部長、技監の職を歴任、昭和18年4月退職、その間大阪市に勤続すること前後23年の長きにおよんでいる。在職中の業績としてはまずもって大阪市発展計画に関与、大

阪駅から難波駅に通ずる御堂筋道路の建設を初め、これに関係する数多くの工事を完成し、また港湾方面においては従来埠頭の整備と南港拡築計画の端緒を開いている。そのほか氏の直接関係に関係していた問題を数えたら恐らく枚挙に暇がないであろう。

氏は性質誠に温順、言葉使いもきわめて穏かで、それがその容貌態度にはっきり浮び出されている。そして世話好きだときているから、市議員の間でもきわめて評判がよかった。言葉少ないうちに万事穏かに解決するからであろう。筆者が彼氏と知り合いになったのは、筆者が内務省大阪土木出張所長に転じてからのことである。ある日のこと土木学会の講演会が大阪公会堂で開かれ、筆者が神戸港と大阪港という題で約1時間あまり講演することになった。そのとき控室に彼氏が訪ねてきて曰く「高西さん、あんたは神戸港が根城だが、今日の話にあんまり大阪の悪口をいいなさんなよ」という。そのいい方が実に軽々しく、しかもひょうきんである。誰でもがあのひょうきんない方には笑顔を作らざるを得ない。そしていつもその態度が悠々としている。彼氏は常にいう、人間はせかせかしないことだと…。電車に乗り降りするにも人が乗った後に乗る。人が降りた後から降りるといふ。実にそれは彼氏のいうとおりである。しかし一度彼氏はそれで失敗した。彼氏の住家は西宮にあるので、ある日会社からの帰り、例の通り悠々と阪神電車に乗り、西宮で人の後から降りようとした。しかしそのときあたかも野球シーズンで、その帰りの群衆がその車を待ちのぞんでいたからたまらない。彼を正面に押し倒し、後から後からの群衆でつぎつぎに押しつぶされ、彼氏はその下に踏みにじられてしまった。そのとき不幸にも彼氏は足の骨折をしたのである。幸に近所の病院で十分な手当をうけ、その傷あとは少しも残ることなく完全に癒ったのであるが、これは彼氏にとって一大災難であった。

こん度の病気は流感に犯かされ、それがついに肺炎を引き起こしたとのこと、お互い老境に入れば、抵抗力の減少は避けられない。彼氏のことだから十分配慮をくばっていたと思うが、恐らくやむを得なかったであろう。享年88歳である。

彼氏は明治37年の卒業であるから、同期友人のうちに大勢の英才がいたことと思われるが、その中で武智正次郎氏と特に親しかった。筆者もよく彼氏の口から武智氏のことを聞かされ、その紹介で武智氏とも親しくなった。武智氏は一種の事業家である。武智式三角くいは氏の特許であって、その製造、打込みを事業とした工務所を設けている。その会社設立にも万端の手伝いをしている。武智氏没後、それを引継いで島良 司氏その他が経営しているが、今日まで彼氏は会長として永年面倒を見ていた。去る1月29日武智工務所社長 島良 司氏が葬儀委員長として盛大な埋葬告別式を挙行し、各般の多数名士の参列をうけたのであるが筆者もその式典に列し、正面に飾られた彼氏の写真を眺めているとなにか「高西さん……」と呼びかけられるような憶をした。しかし今や再びその言葉を聞くことなし。噫々……。

(昭和43.2.1記)

【名誉会員 高西敬義・記】